



# 2016/2017シーズンの 一クリニックにおける インフルエンザの動向と考察

芝尾敬吾

しばおクリニック院長

溝口玲子

しばおクリニック前副院長

福田徹三

サイ・リサーチ

杉浦 諭

株式会社タウンズ

柏木征三郎

独立行政法人国立病院機構九州医療センター名誉院長

## はじめに

インフルエンザの臨床診断は突然の高熱、食欲不振、全身倦怠感、関節痛、その他の呼吸器症状(咳、咽頭痛など)などにより診断されていたが、近年、インフルエンザ迅速診断キットによる診断が可能になり、発熱のないインフルエンザも認められるようになった。このため、当院では、通常のインフルエンザとともに高熱のない患者にもインフルエンザの検査を行い、インフルエンザウイルスの分離同定とリアルタイム RT-PCR により亜型を決定しその実態を検討した。

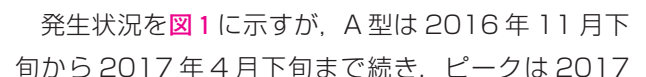
## 対象と方法

2016/2017 シーズンに当院を受診し、迅速診断陽性のインフルエンザ患者 A 型 495 例、B 型 143 例のうち、同意が得られた 125 名の患者さんを対象とした。当院は、循環器内科医 1 名と小児科医 1 名で全年齢を対象に診療を行っているが、今回は 0 歳から 84 歳の男性 59 名、女性 66 名の計 125 例を対象とした。

各症例について、受診年月日、年齢、受診時体温、受診時までの最高体温、鼻汁スコア、過去 3 シーズンにおける罹患歴などを調査した。インフルエンザシーズンにおいて呼吸器症状を呈し、発熱だけでなく家族、学校関連、職場などでの流行を職員が診察前にヒアリングし、診察の結果医師が疑いありと判断した症例に、インフルエンザ迅速診断キット(イムノエース®Flu:タウンズ社製)を使用し鼻汁拭い液あるいは鼻汁吸引液を検体として検査した。陽性および陰性例について、インフルエンザウイルスの分離同定およびリアルタイム RT-PCR 試験を行った。鼻汁スコアについては、問診などで鼻汁の多さを 3 段階に分けて分類し、多いを 3、中等度を 2、少ないかなしを 1 とした。

## 結果

同意が得られた患者さん 181 名を対象に診断を行った結果、125 例が陽性となった。型別判定では、H3N2 が 79 例、B 型では Yamagata が 27 例、Victoria が 19 例であった。

発生状況を  1 に示すが、A 型は 2016 年 11 月下旬から 2017 年 4 月下旬まで続き、ピークは 2017